

学士課程教育

社会や世界に貢献して「真に豊かな人生」を送るための基盤を創る

【ビジョン】

日本の社会は 2039 年に向かって、人口減少や AI の発展等により、人材需要や就労環境が大きく変化していくことが想定される。学士課程教育の最終的な目的は、創立 150 周年を迎える時代にあっても、卒業生が“Mastery for Service”⁴を胸にさまざまな分野で変革に挑戦し、困難な課題を解決することで隣人・社会・世界に貢献して「真に豊かな人生」⁵を送ることにある。

そのための資質について、例えば OECD（経済協力開発機構）は「Education 2030」⁶において「21 世紀型コンピテンシー」を提唱しており、知識（Knowledge）、技能（Skills）に加えて態度・価値（Attitudes and Values）⁷や自律的に行動する力（Meta-competencies）などの概念で整理しようとしている。関西学院大学も 2014 年度に採択された文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業（SGU）の構想において、同様の視点から議論を重ね、「主体性」「タフネス」「多様性への理解」を最も重視するコンピテンシー⁸として掲げた。また、関西学院は創立以来、建学の精神であるキリスト教主義による全人教育において、自らを律する「強さ」や、誠実さ・倫理観・思いやりなど人格としての「品位」を大切にしてきた。

学士課程教育の卒業段階での成果は、大学から見れば上記の資質を備えた人材を世に送り出すことであり、学生の立場で言い換えれば、必要な資質を身に付けて自らが望む最適な進路（就職、起業、進学等）へと踏み出すことにある。その意味で“Employability”（就労能力）の視点が重要であり⁹、それは同時に入学段階での競争力やブランドに影響を及ぼす主要因子でもある。こうしたことから、卒業段階の成果目標は「学生の質の保証」とし、「学修成果の修得」¹⁰と「質の高い就労」を具体的目標に掲げてすべての長期戦略を収斂させ、体系化・構造化を図る。

⁴ “Mastery for Service”は関西学院のスクールモットーで「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、自らを鍛えるという関学人のあり方を示している。

⁵ 2016 年に来学した米・インディアナ大学ビクター・ボーデン教授（高等教育論）は講演「Improving the Value of Teaching and Learning」において、高等教育の最終的な成果として卒業生の“Well-being”を挙げ、調査の際の指標として Purpose（目的をもって前向きに生きているか）、Social（お互いに支え合う人がいるか）、Financial（経済的に安定して暮らしているか）、Community（地域や組織に所属意識と誇りを持っているか）、Physical（身体的に健康で毎日何かに取り組む意欲があるか）の 5 つを示しており、学院における「真に豊かな人生」を構成する主要な要素と考えられる。

⁶ OECD において 2015 年に立ち上げられたプロジェクト（2018 年まで）で、DeSeCo（Definition and Selection of Competencies）プロジェクトで定義された「キーコンピテンシー」を 2030 年という不確実性を増す時代を想定して再定義することを目的としている。

⁷ 態度・価値（Attitudes & Values）は、モラル、共感、粘り強さ、集中力、包容力、好奇心、倫理観、責任感、リーダーシップ等を含み、人格や人間性として統合される。

⁸ コンピテンシーとは、一般的に、企業において高い成果を上げる人の行動特性を意味し、知識やスキルだけでなくそれらを複合的に活用する力を含んでいる。

⁹ EU ボローニャプロセスの「Tuning Project」も基本的な問題意識は Employability（就労能力）にある。

¹⁰ 本稿では文部科学省中央教育審議会の近年の答申に倣い、大学における学びは「学修」を使い、大学教育以外の学びや大学教育には限定されない学びは「学習」を使用した。